令和５年度　千葉県産業教育審議会

令和６年２月１３日（火）
午後２時から午後４時まで
千葉県教育会館　新館４０１会議室

○議長

本日の協議について、流れを説明する。

この後、「千葉県の産業教育」について及び令和５年度に実施された「キャリア教育の推進に係る調査研究事業の調査結果」について、事務局からの説明の後、委員の皆様から専門分野や各業界の現状等を踏まえて、説明に関する所感や県教育委員会の取組への期待などをお話しいただく。

その後、事務局から「キャリア教育の推進に向けた今後の取組」について説明があるので、「本県のキャリア教育と産業教育の推進に向けた取組の在り方」について、御意見をいただきたい。

○事務局

「本県の産業教育」について説明する。

資料４の１の表は、本県の産業教育に関する高校の一覧である。これらの高校を中心に、各学校の特色を生かした産業教育が行われている。

２の表は、令和４年度における学科別在籍生徒数の一覧である。千葉県は、全日制課程・定時制課程を合わせても産業教育関係の専門学科の生徒割合が8.9%であり、全国の17.4%に対して低い割合となっている。次の３の表は過去７年間の入学志願状況だが、専門学科の志願倍率は減少傾向にあり、課題となっている。

産業教育関係高校は、年間を通して産業教育の現状や課題についての研究協議や、専門学科のＰＲなどを行っている。そこで、今年度行った以下の５つの具体的な取組を紹介する。

１つ目は、「千葉県高等学校産業教育フェア」で、専門学科で学ぶ高校生が日頃の学習成果を発表・展示及び実演等により、趣向を凝らした演出で専門学科の魅力をＰＲするものである。令和５年度は１０月２２日にイオンモール幕張新都心で開催し、中学生やその保護者はもちろん、広く県民に対して、専門学科の魅力を発信した。

２つ目は、「課題探究型キャリア教育ゼミの実施」である。３グループの県立高校９校が、専門学科の特性を生かして地域の課題を設定し、解決に向けて探究活動に取り組んだ。このゼミは、他者と協力しながら主体的に課題解決を図るなど、社会人として必要な資質・能力を育成することを目的としている。

３つ目は、「学校提案型魅力発信事業の実施」である。中学生が自らの興味・関心にあった高等学校を選択するためには、高等学校が各学科の教育内容等の

魅力や特徴を中学生に向けて効果的に情報発信することが重要であると考えている。そこで、児童生徒が自らのキャリアを考え、より適切な高等学校選択を実現できるよう、各県立高等学校の魅力ある教育内容等を情報発信した。

４つ目は、「専門学科を体験しよう事業の実施」である。専門学科を設置する県立高校の教員や生徒が、近隣の小学校・中学校の児童生徒等に対して、専門学科の学びを分かりやすく教える体験授業や、魅力を伝えるための広報活動を行った。

５つ目は、「千葉県誕生１５０周年記念事業の実施」である。令和５年６月１５日に千葉県が誕生して１５０周年を迎えた。これに伴い、児童生徒が郷土への愛を深められるよう、県立高校においては職業系専門学科（農業・工業・商業）設置校を中心に様々な取組を実施した。

次に５の「令和６年度 職業系専門学科・コースの充実」について説明する。

県教育委員会では、令和４年度を初年度として、１０年後の令和１３年度を目標年次とする県立高校改革を進めるため、令和４年３月に新たな計画となる「県立高校改革推進プラン」を策定した。

ＡＩ等をはじめとする技術革新の進展等により、社会や生活が大きく変化しつつある中で、本プランでは、生徒が自らの興味・関心や進路希望等に応じた多様な科目選択を可能とする仕組みを充実させるとともに、生徒一人一人の多様なニーズに応じた教育活動を展開することを可能にする体制を整える必要があることや、職業に関する専門的な知識・技能を高めるための実践的なキャリア教育・職業教育の充実、さらには人口の減少に伴う全県的な生徒減少への対応の必要性などが示されている。

これらを踏まえ取りまとめられた「第１次実施プログラム」では、既存のコースの設置拡充のほか、新たな価値を生み出す人材の育成に向けたコースの設置、拠点校の指定や連携組織の設置による更なる連携の充実、さらには幅広い学びのニーズへの対応など、１２項目１８校の再編に係る内容が示された。

令和６年度に実施される職業系専門学科・コースの充実については、資料のとおりである。

県教育委員会としては、今後も各校が、地域や社会の健全で持続的な発展を担う職業人の育成に取り組んでいけるよう、支援を続けていく。

○事務局

続いて、資料５－１「キャリア教育の推進に係る調査研究事業の調査結果」について説明する。

「キャリア教育の推進に係る調査研究事業」については、昨年度の本審議会等において、アンケート項目や調査対象、調査の進め方等について、皆様から貴重な御意見をいただいた。皆様のお力添えにより、本調査も順調に進んでおり、現在は報告書のとりまとめを行っているところである。

結果を報告する前に、調査実施の趣旨について、改めて説明する。

本県では、系統的なキャリア教育の取組を進めているところであるが、依然として、高校卒業者の就職率の低下や早期離職率の高さが課題となっている。そこで、これらの原因を明らかにし、発達段階に応じたより効果的な取組につなげるため、本調査を実施した。

調査は、株式会社ちばぎん総合研究所に委託し、主にアンケート方式で実施するとともに、一部、補完的にインタビュー調査を行った。また、アンケートの設問項目や結果の分析方法等については、有識者で構成されたキャリア教育調査研究推進協議会で協議を行い、多角的に御意見をいただきながら進めてきた。

調査対象は、県内の中学生や高校生など、資料に記載したとおりである。

協議会は、アンケート調査開始前に２回、結果の集計後に２回の計４回開催し、構成員の皆様から様々な御指摘や御意見等をいただいた。

主なアンケート調査の項目については、資料のとおりである。

資料５－２は、調査結果の概要である。時間の都合上、主な項目のみの報告とさせていただく。

はじめに、「１．アンケート調査概要」であるが、今回のアンケート調査は中学生から県内企業までの７つの対象に対し、昨年の８月から１０月までの約３ヵ月間で実施した。

続いて「２．アンケート調査結果」である。

（１）の「①基礎的・汎用的能力の自己認識」についてであるが、すべての対象、つまり中高大社会人において「友だち（他者）の意見は、相手の気持ちを考えながら聞くようにしている」が最も多くなっている。基礎的・汎用的能力の４分類でみると、あくまで自己認識ではあるが「人間関係形成・社会形成能力」に関する項目が相対的に高い一方、「キャリアプラニング能力」に関する項目は相対的に低くなっており、社会で生きていく上で他者と上手く関わる能力はあるものの、自身の将来を考え計画していく能力は他の能力と比較して、まだまだ伸びしろがあるように思われる。

対象間の比較としては、全ての項目において、高校生は中学生より低くなっている。その背景としては、「人間関係形成・社会形成能力」では、自己の確立による他者との距離感の顕在化や仲間との活動機会の減少、「課題対応能力」では、高校生段階のネガティブ志向が強くなること、積極性の低下等が推察される。

次に「②職業適性・社会認識・将来の展望等」であるが、いずれの対象も「保護者や家族とよく会話をする」と回答した割合が高く、特に中学生から大学生までは保護者や家族の影響力が大きいと言えそうである。また、「自分がどのような職業に向いているかわかっている」という職業適性については、中学生で約４割が認識しており、高校生・大学生・社会人にかけて増加傾向にあるが、職業に就いている社会人でも、自分の職業適性については約６割の認識にとどまっている。

続いて「③仕事をするまでに身に付けておきたい力・身に付けてほしい力」であるが、ここでは時間の都合上、高校３年生の回答と、高卒採用をしている企業の回答との比較を紹介する。

この設問は、「その他」と「特にない」を除く１７項目から、高校３年生は当てはまる項目を全て、企業は上位５項目までを選択する形で回答したもので、表１には対象ごとに回答の多かった上位５項目を並べてある。「コミュニケーション能力」、「一般常識」及び「状況の変化に柔軟に対応する能力」の３項目は、どちらも上位５項目に入っている。一方で、企業が求める３位の「基礎的体力」については、高校３年生の回答では８位、同様に企業４位の「新しい知識を身に付けようとする意欲」は、高校生では６位だった。

（２）の「①高校生の進路意向」については、大学進学を希望する生徒が５割を超えており、続いて専門学校、就職となっている。進学を希望する理由については、「自分の興味・関心に合ったことを勉強したいから」といった前向きな理由が７割を超える一方で、「学生生活を楽しみたいから」、「保護者や家族がすすめるから」といった意見も散見された。

「③中学生の進路意向」については、中学３年生では、普通科高校への進学希望が約７割となっている。

高校への進学を希望する理由については、普通科を希望する生徒は「大学等へ進学したいから」、専門学科を希望する生徒は「将来の職業に役立つ知識・技能や、資格が得られそうだから」、総合学科を希望する生徒は「将来の目標が見つけられそうだから」が最も多くなっている。

「⑦働く目的」では、「好きなことを仕事にするため」、「得意なことを生かすため」など、自己肯定感に裏づけられた選択については、中学生は多く、高校生から社会人にかけて少なくなっている。一方、「暮らすのに必要なお金」といった現実的な思考は、すべての対象で多くなっていることから、中学生から社会人と就職が近くなるにつれて、チャレンジ志向が低下し、安定感を重視する意向が強くなることが推察できる。

「⑧仕事を選ぶ際に重視したいこと・重視していると思うこと」については、高校生、県内企業ともに「職場の雰囲気」、「好きなことや得意なことを生かせる」が、上位３項目に入っている。なお、休暇が取りやすいことに対する認識については、企業は１位だが高校生は５位と、若干のずれがあるように思われる。

「⑨退職・転職に関する価値観」では、全ての対象で「自分の力をもっと生かせる職場に転職できるのなら辞めてもよい」が最も多く、自分の能力に合っていない会社なら転職するといったキャリアアップでの転職意向が強くなっている。今まで当たり前だった「同じ職場でずっと働いた方がよい」といった、一つの会社で働き続けるという考えは、どの対象でも１割程度と少数であった。

（３）の「②キャリア教育等で将来を考える上で体験できればよかったこと」では、大学生・社会人ともに「自分の個性や向き・不向きを考える学習」、「イ

ンターンシップ」及び「職場見学」のほか、「職種ごとの収入、休日などの労働条件の学習」も多くなっている。自己理解と職業理解に関する教育が体験できれば良かったとの回答が多かったことがわかった。

続いて、資料５－３で、調査に回答した高校生全員、つまり全学科の生徒の回答結果と、産業系の専門学科に在籍する生徒の回答のみを抽出した結果との比較を紹介する。なお、ここでの産業系の専門学科とは、農業、工業、商業、水産、家庭、看護、情報及び福祉の８学科を示す。

「学校・学科を選んだ理由」については、産業系の専門学科への進学を選んだ生徒の回答は、全学科の生徒の回答と比較して、「自分の興味・関心に合った勉強ができそうだったから」や「将来の目標を見つけられそうだったから」が約２倍、「将来の職業に役立つ知識・技能や、資格が得られそうだったから」については約４倍と、目的意識を持って進学してきた生徒が多いことがわかる。

次に、高校３、４年生の「就きたい職業の有無」についてである。なお、この回答結果には定時制課程に在籍する生徒の回答も含んでいる。高校卒業と同時に就職を希望する生徒が、４割を超える産業系の専門学科の生徒は、当然のことではあるが、就きたい職業が決まっている割合が高くなっている。他方、大学等に進学してから考えるといった生徒も一定数いるため、高校３、４年生全体では約２５％が、産業系専門学科に限ると約１４％が、「まだ決まっていない」としている。

最後に職種についてのイメージについてである。図７は、それぞれの分野の職種について、「面白そう」と回答した割合で、観光、食品、起業などの分野が高くなっている。なお、アンケート実施時に高校生に示した職種ごとの仕事例は、資料下段の点線枠内に記載したとおりである。職種ごとのイメージの集計結果は、４０ページから４３ページまで掲載してあるので、御覧いただきたい。

アンケート調査の結果についての説明は、以上である。

○議長

各委員の専門分野や各業界の現状等を踏まえて、事務局からの説明に関する所感や県教育委員会の取組への期待などについて、御意見や御質問をいただきたい。

○委員

アンケート結果から、いくつか課題も浮き彫りになってきたかなと、興味深く資料を拝見した。弊社は、資料１４ページの（３）学校提案型魅力発見事業において出前事業をしたり、１６ページの（５）千葉県誕生１５０周年記念事業の一環として行われたカウントダウンボードの製作に、一緒に取り組んだりした。これらの活動の中で触れ合った高校生たちは非常に真面目で、いろいろなアイデアを持ちながら積極的に取り組んでいる印象で、設定した課題の解決に向けて

深堀りをしていくプロセスを学ぶ姿を見て、頼もしく思っているところである。
　ただ、このような機会は限られているため、先生方が、より多くの機会を設けてくれるとよいのかなとも思っている。また、県内の企業や団体等が連携をしながら、産業教育全体を盛り上げていく必要性も感じている。
　弊社は、工業高校や情報系の学科を卒業した生徒を採用しているが、高校３年生になってから就職先について迷ったり考えたりするのではなく、１、２年生の段階から、できるだけいろいろな職に触れる体験をしたり、話を聞いたりして、職業観を広げていくことが非常に大切であると思っている。
　また、生徒だけではなく、保護者の皆さんにも労働の現場を見てもらうなどして、安心・安全な作業をしていることを理解してもらう機会を増やしていくことが重要であると考えている。

○委員
　弊社は工業高校をはじめとして、地元だけではなく、遠隔地からも採用しているが、近年は、九州などからの希望者が激減しており、地元志向が強まっているように感じる。千葉においては首都圏に位置しており、東京への憧れを抱く若者もいることから、遠隔地からの希望者も一定数見込まれているが、他地区の状況をみると、遠隔地からの採用については危機感を持っているところである。
　社内でも、デジタル技術などを使った自動化、少量化を進めてはいるが、やはり最後は人間なので、優秀な人材を継続して採用していかないと、弊社だけの問題というよりも、地域経済の危機につながるのではないかとも考えている。千葉県は工業だけでなく、商業、農業と非常に広い分野が地域経済を支えているので、どの方面も同じような危機感を持っているのではないか。
　先ほど委員からもあったが、高校生にはなるべく現物を見せて、早いタイミングから仕事に興味を持ってもらうことが大事だと思っている。弊社がやれることとして出前授業などを行っているが、マンパワーを含めて限界もあるので、教育に携わる皆さんとタイアップしたり、効率的なやり方を模索したりしながら、我々も汗をかきながらやっていかなければと思っているところである。

○委員
　資料１２ページに記載されている専門学科の入学志願状況だが、入学者選抜が前期と後期に分かれていた頃までは１倍を超えているが、一本化された頃から定員割れがみられるようになった。様々な原因が考えられるが、専門高校の生徒募集にアドバンテージが持てるような入試方法をぜひ考えていただきたい。
　学校現場でも産業教育の魅力向上や活性化に向けて、資料１３ページから掲載されているような体験的な活動に取り組んでいる。本校では、課題探究型キャリア教育ゼミで地域食堂の活動に参加したり、学校提案型魅力発信事業では、成田地区の県立高校の５校がタイアップして、成田周辺地区の中学生のためのゼ

ミを開催したりしているが、このように連携することは非常に大事だと思う。
　また、小学校、中学校、高校をグループ化して職員が研修を行うことで、一人も置き去りにしない教育を進めることが、キャリアパスポートを有効活用する一番の手段ではないかと考えている。

○委員
　中学生が工業高校等の職業専門高校に足を踏み出すのは、結構ハードルが高い。本校でも今年度の３年生で専門学科への進学を選んだのは、８％ぐらいしかいない。本校の近くには工業高校や商業高校があるので、専門学科の生徒や教員を招いて、中学２年生の時に専門高校ガイダンスを開催しているが、それでも、このような結果なので、もう少しガイダンスの方法などを検討していかなくてはいけないと思った。
　また、本校では、職業に関する展望を持たせるために、職場体験学習を中学２年生で行っているが、その体験先を探すのに苦労をすることがある。そこで、資料１７ページの福祉系コンソーシアム事務局の設置にあるように、地域のことをよく知っている方が、コーディネーターとして職場体験先をコーディネートしてくれるとよいと思う。
　アンケート結果については、資料２１ページの職業適性や将来の展望等について、「自分が社会と繋がっていると感じている」という中学生の回答がすごく少ないことに注目した。「自分が将来この社会を作っていくんだ。」という意識をもっと高めていく必要があると思っている。技術・家庭科は比較的、生活と密着している学習内容なので扱いやすいが、「どの教科でも自分の生活と繋がっているんだ。」ということを意識しながら指導をしていくことが大事だと思う。
　キャリアパスポートについてもアンケートの結果があったが、活用が難しいという回答が多い反面、キャリア教育を適切に行うために効果的な研修として、キャリアパスポートの活用方法を挙げる回答が下位になっているのが残念だと思っている。やはりキャリアパスポートをうまく活用することが、大事なのではないかと考えている。

○委員
　近隣の高校の福祉コースを選択する生徒が減少してしまって、求人活動そのものが非常に難しい状況になっている。求人については 法人全体で専任を置いて、各高校を訪問して進路指導の先生に説明しながら何とかやっているが、現場の立場からすると、先生方の認識と、現場の仕事内容のイメージとが合っていない気がする。そこで何度か進路指導の先生方に施設や仕事内容等の見学をお願いしたことがあるが、なかなか実現しない。どこの学校からも、あまりよいお返事がいただけない。子供たちの感じている職業に対するイメージと、先生方が感じるイメージと、保護者が感じるイメージとは、全然合っていないような気がす

る。特に高校生の場合には、家族、特に母親が反対すると、全部ダメになってしまうことが多い。さらに先生も、「福祉は大変な仕事だよ。」という。そこで、高校生だけを対象にしていただけではもう間に合わないと思って、介護の未来案内人という県の事業にも参加している。その事業の委員になっている職員が中学校等を訪問して、いろいろな説明とともに、仕事の大変さではなく、楽しさの部分を伝えている。「高齢者は自分たちの先輩なのだから、自分たちで介護をやっていきたい。」という気持ちを持ってほしいということを切実に訴えたところ、就職を希望してくれる人が現れた。

介護の仕事も福祉の仕事も、本当に必要な仕事だと思っている。職業として継続性が途絶えてしまってはいけない。みんなで地に足をつけた感覚を持ってほしいと思う。常に上ばかりをみた職業の選び方もあると思うが、社会の中で人のために役に立つような仕事として、「自分に何かできるか。」という感覚を持てるような指導が必要だと感じている。

アンケート調査の結果には、今の学生さんの感覚が反映されていると思うが、それが将来的な職業としてのキャリアにつながっているのかという部分で、非常に不安に感じている。キャリア教育の指導方法について、もう少し見地を変えてみることも、考えの中に入れていただければ幸いである。

○委員

アンケート結果を見て、生徒や学生が自立的に将来を描き、学習、行動するためには、小学校、中学校、高校の間での繋がりと、家庭、地域、学校、企業、または、双方での連携が大切であると感じた。また、学校教育の段階では、教員が本件に関わる生徒、学生への指導やサポートが重要となるので、その向上のための施策も必要だと思う。弊社においても、従業員の自立的キャリア形成の支援策として、キャリアアドバイザーの導入を進めている。

○委員

雇用情勢についてだが、求人は増加となっており、学卒関係については、求人倍率は２倍、３倍といった状況である。それに対して、生徒さんが少なくなってきているので、より一層、人手不足が深刻化している。今、人手不足感が非常に強まっているが、物価の高騰や中国経済の影響があったり、賃金の上昇への対応があったりして、新たな従業員を募集するのを躊躇っている企業が出始めている。労働局の方で確認した内定率は、大学生等は１２月１日現在で 74.4%、高校生は１１月末現在で 76.7%であり、特別な状況ではない。これが、１２月、１月、２月、３月と追っていくと、８割、９割と内定率は上がっていく。

ハローワークでは、求人に関する情報提供のほか、職業意識を育てるために、様々なセミナーなどを実施しているが、各学校とハローワークの連携を強めていく必要があると感じている。

また、企業からは、「どの学校に就職を希望している生徒さんがいるのかがわかりづらいので情報が欲しい。」という相談が寄せられている。資料１６ページには「令和６年度職業系専門学科・コースの充実」として紹介されているが、このような取組を実施しているといった情報を、企業に伝えられるとよいと思う。

資料１２ページの「専門学科の入学志願状況」を見ると、看護科の志願倍率が１倍を超えている。看護職は人手不足が厳しいところなので、せっかく看護科への進学を希望しているのに、定員の関係で先に進めないというのはもったいない。希望者の多い学科については定員を増やしていくような対応をしていくとよいと思う。先ほど話があったが、看護や福祉といった人手不足の職種については、仕事の魅力を発信していく必要がある。ハローワークも協力させていただければと考えている。

○委員

アンケート結果に、「職場の雰囲気が気になる」というような回答があったが、会社側の雰囲気づくりが、早期離職の防止や職場選択に当たって重要視されていることが見てとれた。また、職場側からは、「基礎的体力や新しい知識や経験、学力を身につけようとする意欲が欲しい」というアンケート結果があったが、全くその通りだと思った。

○議長

次に、「キャリア教育の推進に向けた今後の取組」について、事務局から説明をいただきたい。

○事務局

続いて、「キャリア教育の推進に向けた今後の取組」について説明する。

まず、資料５―１の「趣旨」で示した本県のキャリア教育の課題認識に照らして、調査結果はどのようなものだったかということを、資料６の１ページで説明する。

はじめに「高校卒業段階までに、進学者も含め、子供たちに十分なキャリア意識を育めていないのではないかという懸念」については、これを裏付けるデータが散見された。資料５－２、２０ページに示したとおり、中高生ともに、キャリア教育で育成を目指す「基礎的・汎用的能力」の「キャリアプランニング能力」に関する項目の自己認識に課題が見られた。「将来働くことの意味について考えている」と答えている中学生が 36.8%、高校生は 23.3%に留まっている。

また、資料５－３、３５ページにあるように、高校生が在学している高校の学科を選んだ理由として、「自分の学力に合っていたから」の回答が最も多く(61.5%)、「将来の職業に役立つ知識・技能や資格が得られそうだったから」(11.8%)や「将来の目標を見つけられそうだったから」(13.1%)は少なくなって

いる。さらに、戻って２３ページであるが、高校生が上級学校（学科）への進学を希望する理由として、「自分の興味・関心に合ったことを勉強したいから」の回答が最も多くなっている(73.4％)一方、「学生生活を楽しみたいから」(14.6％)や「保護者や家族がすすめるから」(9.2％)なども一定数の回答がある。

続いて「産業界が求める人材と、教育現場から輩出される人材のミスマッチが起こっている可能性」については、生徒・学校側と企業側で仕事をするまでに身に付けるべき力の認識については「コミュニケーション能力」、「一般常識」、「状況の変化に柔軟に対応する能力」などギャップが少ないことがわかった。２１ページから２２ページにかけて示したとおりである。しかし、それらの力を十分に育成できているかという点については、キャリア意識の育成と密接な関連があるため、課題があると考えられる。

また、企業が挙げた新卒採用に当たっての課題として、「求めるレベルの人材が採用できない」などの回答が一定数を占めている。３４ページに示したとおりである。計画どおり新卒高卒者を採用できた企業、計画した人数を下回った企業の双方において、「求めるレベルの人材が採用できない」(計画どおり:31.6％ 下回った:15.6％)、「求める人材が学校から推薦されない」(計画どおり:10.3％ 下回った:23.1％）との回答が一定数を占めている。大卒新卒者等についても同じことが言える。これらのデータから、今後、子供たちに十分なキャリア意識を醸成し、産業界が求める人材を育成するために、更なるキャリア教育の取組を推進していくことが重要と再認識することとなった。

続いて資料４５ページからの、令和６年度の本県の主な取組について説明する。

はじめに「１　高校生の就職支援」である。県が３１校３３課程を「高校生就職支援事業」の対象校として指定し、指定校が実施する生徒対象の講演会や教員の研修の費用、教員の企業訪問の旅費、インターンシップ保険費等を補助したり、近隣事業所の進路開拓や生徒の進路選択の援助を行う就職支援教員を１８校に配置したりするなどして、生徒の就職活動の充実を図っている。

続いて「２　職業理解のための映像教材制作」である。こちらについては、令和４年度に職業編、学科編併せて１２本の教材を制作したが、来年度その続編を制作するものである。実社会で働く人々のドキュメンタリー動画や専門高校の学科を紹介する動画であり、中・高校生が産業や職業についての理解を深め、職業意識の形成や主体的な進路選択に役立てられるよう、映像資料とともに授業で活用できるワークシート例を県ホームページで公開することとしている。令和６年度は前回とは異なる職業分野と学科を取り上げる予定である。

「３　キャリアデザイン講演会の実施」は、県立高校において、企業経営や科学技術分野等で活躍する著名人による講演を実施するものである。講演は動画に編集し、県内高校生向けに限定公開している。高校生が様々な生き方や考え方に触れ、自らの職業観を養い、見通しを持って学校生活を送るきっかけとしたい

と考えている。実績は資料に示しているとおりであるが、講演会を聞いた生徒からは、「自分の進路に関する視点が増えて、とても自分のためになる講演だった。」や「自分の叶えたいことを、世の中のせいにして諦めるのではなく、無いのなら作ってしまおうという行動力が必要だと感じた。」などの感想が寄せられており、子供たちに夢を与えることのできる講演会を今後も実施していきたいと考えている。

続いて「４　課題探究型キャリア教育ゼミの実施」については、先ほど資料４の１４ページで説明したとおりである。２月５日に３グループの生徒による成果発表会が実施され、各校で協力して商品開発を行ったり、小学校・中学校にプログラミングの出前授業に行ったりした様子の発表があり、１年間の生徒の探究活動の成果を確認することができた。

「５　中高生対象キャリア教育実践プログラム研究事業の実施」は、今年度は高校生を対象に実施したものを、来年度は中学生を追加して拡充実施するものである。キャリアデザインの考え方や、自己理解の重要性について学ぶ教材を委託業者に作成してもらい、年間を通して３ステップ、おおよそ授業６コマをかけて実施することを通して、キャリア意識を高め、希望する進路を追求しながら目的意識を明確にして、卒業後の進路選択につなげていくもので、対象は中学２年生と高校１年生としている。モデル事業であるため、年度初めと最後のプログラムの実施前後に、アンケートや適性等診断テストなどを実施し、プログラム実施前後の生徒のキャリア意識の変容を調査・分析し、事業の効果を検証することとしている。今年度の実績は資料のとおりである。

「６　中学校教員の県立高校専門学科の視察研修」は、令和６年度の新規事業である。中学校の教員は、自らが普通科高校出身であることが多く、高校の専門学科の学びを深く理解、体感できていないのではないかという課題認識の下、初めて進路指導を担当する若手教員などを対象に、高校の専門学科ではどのような学びを実践しているのかを知ってもらい、幅広い進路指導に役立ててもらおうという目的で実施するものである。来年度は地区ごとに計１４０名程度の参加を予定しており、６～７月の１日に午前と午後で２校を視察し、実際の授業を見学するものである。進路相談などが夏休み頃から本格化するので、その前に実施し、各校における指導に活かせるようにしたいと考えている。

最後に「７　その他の取組」で示した「キャリア教育教員研修」についてである。これは継続で実施しているもので、年に１回ではあるが、中高の進路指導担当の教員を対象に、今必要なキャリア教育の視点や、産業動向等について外部講師を招致した研修を行っている。

また、資料４の１４～１５ページに示した「学校提案型魅力発信事業」と「専門学科を体験しよう事業」についても、主体的な高校選択の推進のための取組として引き続き実施していく。

説明は以上である。

○議長

事務局から説明のあったこれらの取組に対する意見や、その他の効果的な取組の提案、また、県の取組に対して、皆様の立場からどのような協力が可能か等、本日のテーマを踏まえて、幅広く御意見をいただければありがたい。

○委員

課題と調査結果については、様々な懸念や考えるべきポイントもあると思うが、それほど悲観しなくてもよいと思っている。私自身を振り返っても、中学生や高校生の時に、将来のことをあまり真面目に考えることはなかった。子供を育てながら見ていても、毎日部活動のことで頭がいっぱいで、将来のことをそれほど深く考えてなかった気もする。これは家庭環境や、子供の能力によっても違うと思う。この結果は大事だが、これを踏まえて何をしていくかを考えていくことが大切である。

私は弊社において社員の育成に携わっているが、企業における本人の資質や頑張りは、経験上、その本人に関わることや環境、上司の３つの掛け合わせで、どう伸びていくかが決まっていくと感じている。そのような意味では、キャリア教育についても、本人や学校や先生方にどうアプローチしていくかということが大事なのではないかと思う。

資料４５ページにある「映像教材の制作」についても、非常に有意義なことと想像できるが、大切なことは、この教材がどれくらい見られていて、どんな反応があり、どんな変化が起きたかということを、定量的、定性的に効果検証していくことだと思う。その上で、非常によいものであれば、「もっと広めていこう。」とか、「もっといろいろな人に見てもらおう。」とか、「我々企業側も見て自分たちの立ち位置をちゃんと確かめよう。」とか、様々な活用の仕方があると思うので、作ったものの活用をより深くより広く考えていくとよいと感じた。

弊社もキャリア教育の出前授業を行っているが、実はマンパワーが限界という実情は、先ほどの委員の話と全く同じである。活用しやすいプラットホームがあって、学校側からも企業側からも簡単にエントリーでき、そこを使っていくと、より早く確実によい出会い、マッチングができるような仕組み作りがあるとよいと思う。企業側のボランティア的にできる部分にもコストが相当かかるので、そういった仕組みや仕掛けが、教育側と産業側で検討できるとよい。

○委員

このアンケート結果については、それほど違和感を持っておらず、こんなものかなと思う。それほど悲観する必要はないと思う。特定の業界に限らず、「あんな仕事がある。」、「こんな仕事がある。」ということを少しでも早い段階で、知っておいてもらうことが必要だと思う。

ただ、企業としてもやれることの限界があるので、先ほどのお話にもあったよ

うに、うまく生徒と企業がマッチングできるような仕組みを模索していきたいと考えているところである。

○委員

高校生のキャリア教育としては、職場を見学するだけでなく、実際に体験をしてもらうことが大切なので、令和６年度の本県の主な取組として示されているインターンシップ事業に関する支援については、ありがたいと思っている。

映像教材の制作については、作って見てもらうだけでなく、自分が出演できるようなものが作れると視聴率が上がると思う。課題探究型キャリア教育ゼミについては、ますますの充実を願うところである。中高生対象のキャリア教育実践プログラムの研究事業は、３つのステップを踏んでいくということだが、このような構成でよいと思う。県立高校専門学科の視察研修については、専門学科の先生方と中学校から見学に来た先生方が、協議できるような時間がとれるように計画してもらえるとありがたい。

農業教育や工業教育については、総合教育センターの研修として、１０月の第１週の火曜日に校外研修を行っているが、その研修を商業はじめ他の部会にも広げられるとよいと思う。

○委員

アンケート結果を拝見して、残念な結果もありながらも、予想どおり、想定内という感じがした。中学生の結果をみると、働く目的として、「好きなことを仕事とするため」と回答した割合が一番多いのは、夢があってよいと思う。しかし、課題にも書かれているように、キャリアプランニング能力に関する項目については、もう少し高めていかなければならない。それには、学校生活の中でも、係活動や学習活動を通して、「それぞれちゃんと役割があって、社会生活の中で自分が役立っているんだ。」という意識を持たせるような取組も大事だと思う。

また、令和６年度の取組として、様々な教材などのツールを作成してもらえるのは大変ありがたいことだが、これまでも職業理解を目的としているものになりがちだったので、その職業を知ることだけではなく、一人一人が自分の在り方とか生き方とかを考えられるようなきっかけになるプログラムも併せて提供してもらえると、学校現場としては大変使いやすいと思った。

○委員

課題や取組については、これだというのはないと思う。今までやっていることを、どう工夫したらよくなるかを考えながら進めていくしかない。

今、子供たちのコミュニケーション能力が非常に不足している。特にコロナ禍以降、口をきかない子供たちが増えているので、中学生ぐらいの時に、一般的な社会性をもう少し養えるとよいと思う。職業ということよりも、人間としての社

会性を身に付けて社会の中で生きていくことを、もっと指導してほしいと感じている。その上で、職業を選ぶための能力を養っていくのがよいと思う。

そして、やはり先生方の研修は、非常に大事だと思っている。後々、子供たちの職業選択にも非常に大きな影響を与えてしまうので、すごく重要な課題であると感じている。

○委員

弊社では、人材ミスマッチを防ぐ学生のキャリア形成支援として、就労型のインターンシップや、専門性を要求される実務を職場で体験するインターンシップの機会拡大に取り組んでいる。

○委員

資料４４ページに書かれている課題の「ミスマッチ」について、各学校の進路指導の先生方は生徒さんとよく話をしながら、その上で就職先を決められていると思う。しかしながらミスマッチは生じてしまう。

求めるレベルの人材が採用できないということについては、捉え方がすごく難しいと思っている。高校生に対して、企業の製品のプレゼンができるような能力を求めているのか、それとも、業務指示が聞けて、指示どおりにきちんと仕事ができれば、それをもってコミュニケーション能力があると判断されるのか。ハローワークの課題として、「そのようなレベル感が表現できるのか。」、「どのように企業から聞き取ったらよいのか。」ということを考えていきたい。

資料４５ページに記載されている高校生の就職支援については、労働局としても、しっかり取り組んでいきたいと思う。

○委員

今、農業情勢や酪農情勢は激動している。２０年前、１０年前、現在と、とても変わってきている。それに伴い、若手経営者の経営方針も全く変わってきている。生き抜くためには、昔のとおりにやっていてはダメで、そういう中で、若手が今の社会を見て、苦労して、先を見てやっている。

しかしながら、若者の中には、ある日突然、会社に来ることができなくなってしまう人が増えていると聞く。社会に馴染めない子たちが増えてきているので、その子たちをどうしたらよいのかという観点で考える必要がある。

もう１つは、経営者側が変わっていかなければいけないということ。経営者側の人間が、今の社会情勢に合わせてどんどん変わっていく必要もある。

このような中で、前向きに頑張って苦難を乗り越えてやっているような人の講演会をもっと増やして、今の生徒さんたちが、「この人みたいになりたい。」と思うような人材に会わせてあげたいと思う。また、その講演会に企業側も参加し、社会の変動に即した会社経営や人材育成に努めるようになる事で、学生と企業

の「ミスマッチ」が減るのではないかと思う。
　体験だけでは間に合わない部分は、読書をもっと勧めてほしい。また、食育も大事だと思う。

○議長
　振り返って、何か付け加えるようなことがあれば、お願いしたい。

○委員
　資料の４５ページにあるキャリア講演会のように、実際にその場で話を聞くという機会は非常に大事だと思っている。しかし、その機会が数回しかない。
　そこで、学校のネットワーク等を活用して配信できるとよいと思う。また、学校側も予算がなくて、活動の機会や人数を増やすことが難しいという話も聞くが、予算があればこのような機会を増やすことができる。限られた教育に関する予算なので配分も難しいと思うが、今日の議論を踏まえて、うまく反映していただけると大変ありがたいと思った。

○議長
　今、機会を増やすという御意見をいただいた。これはとても大事なことだと思う。
　今日、皆様の御意見を聞いていて、職業のことを考えたり、判断したりするためには、非常に大きな括りではあるが、やはり「知ること」なんだろうと思った。知らなければ考えることもできないし、判断もできない。今回、その「知る」ということの方策について、県教育委員会から御提案があったし、委員の皆さんからも御意見があった。今回の調査結果について、あまり悲観的に考える必要はないといった背中を押すような御意見もあったが、そのことを力強く受け止めながら、ぜひ、各委員の皆様の御意見を、子供たちが「知る」というところに焦点化して整理していくとよいと思った。
　時間になったので、これで協議を終了する。